

## 「としま・まちごと福祉支援プロジェクト」セミナー・イベント（2021年5月開催）ご報告

5月15日（土）、「としま・まちごと福祉支援プロジェクト」セミナー・イベントの報告です。

3月から延期になっていた立教大学 21 世紀社会デザイン研究科教授の萩原なつ子先生のセミナーを開催しました。区民センター会議室で開催する予定で準備を進めていましたが、4月25日から5月11日までの発出された緊急事態宣言、さらに延長が決まって区民センターが使えなくなり、急遽「共生サロン南池袋」で対談収録を実施し、基本はオンライン視聴というかたちをとることになりました。

「としま F1 会議」において座長を務められた萩原なつ子先生と、当時豊島区の企画課長でアドバイザー委員を務めた佐藤和彦氏のおふたりに「としま F1 会議」で得たものを振り返っていただく対談からスタートしました。

2014年、豊島区が日本創生会議によって“消滅可能性都市”と指摘されたとき、「わたしたちが豊島区を変える」と、ワークショップに集まった女性たちが6つのワーキンググループに分かれて当事者目線での政策提言を行い、各部署の責任者も参加して翌年 11 の事業を実現させました。この「としま F1 会議」をひとつのきっかけとして

区政への市民参加の道が開かれ、市民協働事業の先行例となりました。女性が暮らしやすいまちは、誰にとっても暮らしやすいという視点で、まちが変わっていったのです。

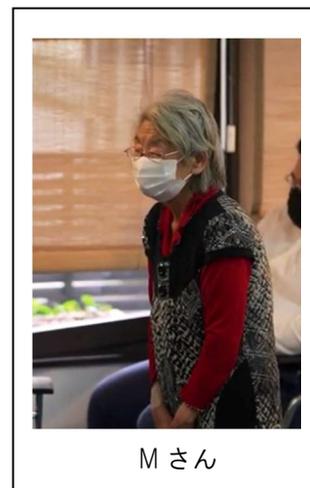
しかし、昨年来のコロナ禍。今起きているのはまさに災害であり、誰もが被災当事者ではあるけれど、特に社会的弱者といわれる人たちにしわ寄せが起きている。これまで取り組んできた福祉を後退させ、格差や孤立を助長させる事態になっています。私たちがこの状況にあらがうためにどうしたらいいのか、萩原先生は2つのヒントをくださいました。

1つは、英国発の「社会的処方」という考え方。孤立という病を、医師による薬という処方箋だけでなく、社会的なつながりを処方しようという考え方です。もう1つは、「くらし×〇〇 つなぎの手帳」（日本 NPO センター発行）。同じ地域に住んでいながら関係を築きにくく、声にならない SOS をキャッチし、さまざまな人たちと共に取り組む「共助（互助）」と「連携」がますます必要となっていると、萩原先生は指摘します。どちらも、地域社会におけるつながりを編み直そうという提言で、共生サロンを通じたコミュニティづくりを目指す私たち「としま・まちごと福祉支援プロジェクト」も、おおいに励まされたセミナーとなりました。

当プロジェクトで展開する共生ハウス西池袋の居住者となり少しずつ生活を立て直してきた M さんの紹介がありました。交流拠点の共生サロン南池袋にて運営に関わり始め生活のリズムを取り戻しています。孤立せず、社会とのつながりのある場づくりを目指していきます。



▲左：佐藤和彦氏 右：萩原なつ子氏



M さん